



安積の歴史シリーズI



第14回 近世 奥州街道と 安積7宿・安達6宿の建設

柳田 和久 (やなぎだ かずひさ)

郡山市文化財保護審議会
委員



奥州街道の建設

慶長9年(1604)、徳川2代將軍秀忠は諸国に街道の建設を命じ、道路の幅を5間(約9m)とし、1里(約4km)ごとに一里塚を築き街道を整備した。さらに、慶長16年(1611)、宿場に荷物の運輸・通信業務、休宿泊業務を命じた。⁽¹⁾これにより、東海道・中仙道・日光街道・甲州街道・奥州街道の5街道が建設され、各街道に宿場が置かれた。

奥州街道は、江戸日本橋から白河までであるが、元和3年(1617)に日本橋から宇都宮を日光街道としたため、厳密には宇都宮から白河までの11宿である。⁽²⁾白河より三厩(青森県東津軽郡外ヶ浜町)までは脇往還で奥州松前道等と称しているが、一般的には奥州街道と呼んでいる。

そのうち、安積郡では笹川・日出山・小原田・郡山・福原・日和田・高倉の7宿、安達郡では本宮・杉田・二本松・油井・二本柳・八丁目の6宿が宿場に指定された。

宿場の業務

宿場の業務に運輸・通信業務、休宿泊業務があ

る。運輸・通信業務とは、人や馬によって荷物や書翰を宿場から次の宿場まで運ぶことである。馬に積んだ荷物を次の宿場まで運び、次の宿場で別の馬に積み替えて運ぶのである。宿場ごとに人や馬を交代して荷物を運ぶことで、このような輸送を人馬継立と称している。業務を差配する役人を問屋と呼び、荷物を積み替える所が問屋場である。⁽³⁾

休宿泊業務とは、旅行者を休宿泊させることである。休宿泊施設には本陣・脇本陣・旅籠屋・茶屋等がある。本陣は、主に参勤交代の大名や、將軍、幕府役人、宮家、公卿、高僧等が利用した。脇本陣は、本陣の補助的役割を果す施設で、参勤交代などで家臣が休宿泊した。本陣を利用できる者は一部の特権階級であり、一般の人は利用できなかった。⁽³⁾

一般の人が利用するのは旅籠屋である。旅籠屋には食事付きの平旅籠屋、米などを持ち込み自炊しながら宿泊する木賃宿がある。他に飯盛旅籠屋や茶屋がある。飯盛旅籠屋は飯盛奉公人を抱えている旅籠屋のことで、郡山宿・本宮宿には100人前後の飯盛奉公人がいた。茶屋は旅行者に昼食や

茶・菓子などを提供する休憩所である。飯盛奉公人を抱えている茶屋もある。⁽³⁾

運輸・通信業務、休宿泊業務を行うには、ある一定の人馬や休宿泊施設が必要であった。新たに開設した宿場では、近隣から人家を移動させて、宿場を建設しなければならなかったのである。

ふるかいどう
古街道

安積郡では、奥州街道が建設される以前の街道を古街道と称している。古街道は笹川・日出山から小原田、横塚の芳賀池の脇を通り、福原の東（富久山清掃センター辺り）を経て、梅沢を通り、高倉の館の東に出ていたと伝えられている。⁽⁴⁾ 古街道は、阿武隈川の自然堤防や河原を通過していたと考えられる。奥州街道は、洪水等を避けながら、古街道とは別に新たに開設した。そのため、問屋場や本陣・旅籠屋・木賃宿・茶屋等を建設したのである。

安積7宿の建設

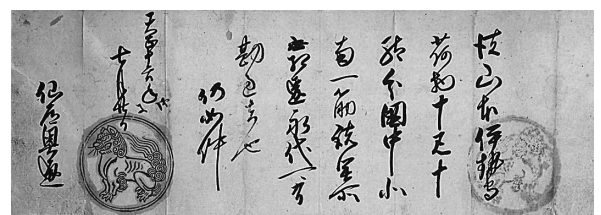
笹川は、室町時代には篠川御所が置かれていた。御所は関東公方足利満兼の弟満直の館である。御所の西側に西宿・三日市場・飴宿・広町等の町が続いていた（現在の西宿公園からケーヨーデイツー辺り）。慶長9年（1604）に、街道の整備が命じられると、御所の中央を奥州街道が通った。そのため、御所の土塁は崩され、堀も埋められた。同18年（1613）に宿場になると、西宿・三日市場・飴宿・広町より人家を移して宿場を建設した。⁽⁵⁾

日出山は、日出山宿から西畑・台畑・北千保（現在のビッグ・パレット辺り）にかけて幾つかの郭が連なっていた。西畑・台畑・北千保の館主は不明である。その後、会津の蘆名氏が日出山を領すると日出山豊後を配し、三春の田村清顕が支配すると国保久左衛門を入れた。国保久左衛門が住んだ所は日出山宿の一面に築かれた郭である。その頃の人家は西の四日町（現在のビッグ・パレット辺り）にあった。国保久左衛門は、田村郡上行合村の佐藤三郎左衛門盛保を婿にして相続させた。慶長年間に新道（奥州街道）が開設されると、人家を四日町より郭内へ移し、三郎左衛門父

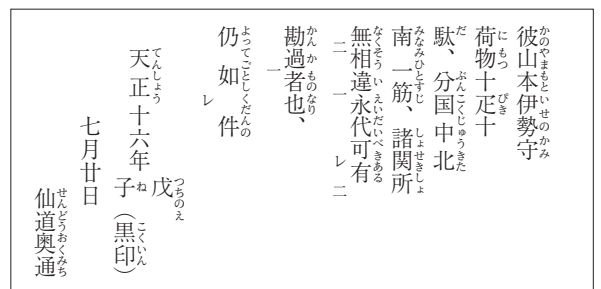
子に肝煎（名主）と問屋を命じた。⁽⁶⁾ 以後、代々三郎左衛門の子孫が名主と問屋を勤めた。日出山宿は、四日町より人家を移して建設したのである。

小原田の西館（現在の香久山神社・小原田小学校）は、伊東茂信の居城であった。西館は天正2年（1574）に茂信が建てた館であると伝えられている。その頃の人家は西館付近に東西に並んでいた。慶長9年に西館の東側を奥州街道が通ったため、街道に沿って南北に人家を移し替え、宿場を建設した。⁽⁷⁾ 小原田宿は慶長18年（1613）に町割が施行されており、その時の地割とされる絵図面が残されている。⁽⁸⁾

郡山は、戦国時代末期には、郡山城（現在の駅前陣屋）の南側や西側に家が建ち、町が形成されていた。天正16年（1588）の郡山合戦でそれを確認できる。6月13日に佐竹・蘆名勢が郡山城に鉄砲を撃ちかけた。その様子を「西の台へ山を二つ築き、要害の如くかまへ、小旗を立て、町を見おろし鉄砲を打ちかける」と記載している。⁽⁹⁾ 郡山は町と呼ばれるまでに発展していたのである。伊達政宗は郡山城に玉葉や兵糧を送り援護した。玉葉や兵糧を郡山城に運んだのが山本伊勢守である。戦いが和睦すると、伊達政宗は軍需物資の輸送にあたった山本伊勢守に対し、「荷物十疋十駄」の伝馬黒印状を与え、安積郡から志田郡（宮城県）に至る奥州街道の通行を公認し関銭を免除する恩賞を与えた。⁽¹⁰⁾ さらに、天正18年（1590）に、浅



第1図 伝馬黒印状（郡山市七ツ池 鹿野家所蔵）



書下し文

野長吉（長政）が会津城主蒲生氏郷に、山本伊勢守の役銭免除等の保護を依頼している。⁽¹¹⁾ 山本伊勢守は、伊達政宗や浅野長吉等の戦国大名と結ぶ豪商で郡山に居住していた。郡山は山本伊勢守等の豪商が住む町として発展していたのである。

久保田村は宿場ではないが、現在の地より2・3町（約218～327m）東にあった元久保田（現在の古町）より集落を移して建設した。⁽¹²⁾

福原宿は、元々は阿武隈川沿いに集落があった（富久山清掃センター辺り）。慶長年間に新道が開設されると、阿武隈川沿いにあった集落（西宿）を移したのである。そのため、今でも宿の東の地を西原と呼んでいる。⁽¹³⁾ 福原宿は、新道の開設によって西宿より集落を移したのである。

日和田は、天正以前には宮下（現在のジャスコの北側辺り）に集落があったが、宮下から阿武隈川沿いの日和田八丁目の根岸に移り、さらに慶長年間に、現在の日和田へ移ったと伝えられている。⁽¹⁴⁾

高倉は、高倉城が山の上に築かれており、山の東側に集落があった。古街道は日和田八丁目から梅沢を経て山の東を通っていた。新道が山の西を通ったため、山の東側より西側に民家を移したと伝えられている。⁽¹⁵⁾

安達6宿の成立

本宮宿は北町と南町から成っている。北町は、天正13年（1585）頃は一面畑で内町に人家があった。慶長5年（1600）頃に、内町から北町に人家が移り集落を形成した。⁽¹⁶⁾ 南町は、慶長9年（1604）（本宮南町由来記には慶長5年とある）に小沼伊賀等が、伊達政宗より町の建設を命じられ、慶長13年に舟渡町・中町・柳町の3町を建設して移住したと伝えられている。⁽¹⁷⁾

杉田宿の間屋甚之丞は、慶長15年（1610）以前より間屋を命じられていたが、改めて会津城主蒲生秀行の家臣岡重政・町野繁仍より間屋を命じられた。⁽¹⁸⁾ 杉田宿間屋は慶長年間（1596～1614）より勤めている。

二本松は、寛永20年（1645）に丹羽光重が10万石の大名として二本松に入城した時は手狭であった。そのため城下を拡張した。まず、郭内と郭外

に区画し、郭内を城郭と家臣の侍屋敷とし、郭外は若宮町・松岡町・本町・亀谷町・竹田町・根崎町の6町で、郭外に町人を住ませた。郭内と郭外の間には寺社を配置し、切通しには御門を設け郭内と郭外の往来を制限した。二本松はすでに若宮町・坂町・杉田町・本町・中町・塗屋町・鍛冶町・大工町等が形成されていたが、正保元年（1644）から慶安4年（1651）までに奥州街道を付替え、街道に沿って町人町を建設し、本町・中町を本町・亀谷町に、塗屋町を竹田町に、杉田町を松岡町に、鍛冶町を若宮町にそれぞれ移し、根崎町を新たに建設して城下6町とした。⁽¹⁹⁾

油井宿は、新道開設によって油井宿より10町（約1,100m）ほど西にあった元油井から人家を移して、宿場を建設したと伝えられている。⁽²⁰⁾

二本柳宿には家がなく広々とした野原で、旧街道は石通りと称され羽黒山の下を通っていた。慶長3年（1598）に、渋川村内の二本柳に新たな町を建設し、荷物輸送の継場（荷物の積替場）にしたと伝えられている。⁽²¹⁾

八丁目宿は、八丁目村・鼓岡村・天明根村で形成されている。八丁目村に宿治と称する所があり千軒の家があった。八丁目宿は宿治より集落を移して建設したと伝えられている。⁽²²⁾

註

- (1) 児玉幸多編『近世交通史料集』8
- (2) 豊田武・児玉幸多編『体系日本史叢書 交通史』
- (3) 註2
- (4) 郡山市歴史資料館所蔵今泉家文書社会392
- (5) 明治19年『地誌 岩代国安積郡笹川村』
- (6) 明治13年『岩代国安積郡日出山村地誌』
- (7) 明治14年『岩代国安積郡小原田村地誌』
- (8) 『福島県史』10
- (9) 「貞山公治家記録」『政宗記』『伊達日記』
- (10) 『郡山市史』8
- (11) 「松藩搜古」（『福島県史料集成』第二編）
- (12) 二本松市発行『翻刻相生集 上』
- (13) 「本宮南町由来記」（『岩磐史料叢書』中巻）、「本宮南町記全」（『本宮町史』5）
- (14) 註12、『本宮町史』5
- (15) 『二本松市史』6
- (16) 註12
- (17) 註12
- (18) 註12